



豊かな自然、貴重な生物…… 中山間地の「宝」をビジネスにどう生かす？

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏（一般社団法人 ^{やまなび}山学 代表理事）

見方を変えれば、日本の田舎は宝の山

前回の本レポート（地域を興すvol.7／OKB REPORT Vol. 201）で紹介した、岐阜の地域活性化に奔走する秋元祥治さん（武蔵野大学アントレプレナーシップ学部教授）の言葉だ。過疎化が止まらない中山間地ではあるが、地域には磨きをかけることで価値が生まれ、魅力的なビジネスへとつながる可能性が眠っているのだということを、全国各地の事例を交えて語ってくれた。

では、私たち山学が拠点を置く周辺地域に眠る魅力とは何だろうか。秋元さんのメッセージを踏まえて改めて自分たちの足元を見つめ直したとき、思い浮かんだのは昨夏に開いた自然体験「ヤマナビキャンプ」での光景だった。

岐阜県本巣市北部の山あいを流れる根尾川で、子どもたちが専門家のガイドのもと生物調査をしたところ、貴重な生きものを次々と発見し、地域の川の美しさを肌で感じる事ができた。街中では味わえない豊かな自然の中で、目を輝かせる子どもたちの姿があった。

こうした自然環境こそが、磨くべき地域の「宝」になり得るのではないか。そんな思いから今回、ヤマナビキャンプでガイドをしてくれた寺町茂さんが長年続けている生物調査に同行し、ビジネスにおける可能性を考えた。



岐阜市の里山で採集したホトケドジョウやクロゲンゴロウ。
いずれも、絶滅が危惧されている貴重な生きものだ

ホトケドジョウは 「かろうじておる」

4月下旬、岐阜市東部の山あいへと向かった。寺町さんは元教員で、30年超にわたり本巣市や岐阜市を中心に水生生物の生育環境を調査している。今年1月、生物多様性の保全への貢献が認められ、「環境保全推進功労者」として岐阜県知事から感謝状が贈呈された、地域環境のスペシャリストだ。

寺町さんは2009年から、岐阜市の「貴重野生動植物種」に指定されているホトケドジョウのモニタリング調査

を市から任されている。毎年、市内の水路や河川の調査スポットを定点観測し、環境の推移を追いつけてきた。今回もその調査の一環で、里山の風景がどこか懐かしく美しい大洞地区にやってきた。

午前9時45分、気温は20.4度。雲間から春の穏やかな日が差し込む。この日最初の調査地点は、山と田んぼに囲まれた湿地と、そこから数十メートル山へと分け入った湧水地点の2か所だ。「マムシが出るで、気をつけて」。一緒に調査をする岐阜市の担当職員たちに声をかける。

まずは水質の測定から。pH（水素

イオン指数）のほか、有機物による水質汚濁の度合いを見るCOD（化学的酸素要求量）を測った。この数値は高い方が、汚染が進んでいると判断される。湿地では10、湧水地点では5と出た。わずかな距離ながら、汚染の度合いに差が見られた。

水質の確認後、ホトケドジョウの採集を始めた。胴長をはき、網を手にして水の中へと入っていく。水深は膝の半分ほどの高さだ。沼地に足をとられないよう慎重に進みながら、植物の茂みや湿地のきわをガサガサと探り、網をすくい上げては、泥の中に生きものの姿がないかを確認していった。

だが、なかなかホトケドジョウの姿は
見えない。「とれんなあ。昔はめっちゃめ
ちゃおったんやけどな……」

20分ほどの採集で確認できたホト
ケドジョウはわずか5匹だった。それも
湿地の方で5匹採集できただけで、湧
水地点の方では1匹も見つからな
かった。寺町さんいわく、「かろうじて
おる」という状態だという。ホトケドジョ
ウ以外には、別種のドジョウやミナミメ
ダカのほか、環境省のレッドリストに載
るクロゲンゴロウも1匹採集できた。

午前11時、この日3か所目となる別
のポイントへ移動した。定点観測の長
年のポイントの一つだが、一見してそ
こに水はなく、一部にうっすらと浮か
ぶ程度だった。寺町さんによれば、こ
の周囲はかつて一帯が池だったとい
うが、年々湧き水が減り、いまでは池
だったことすらわからないほど雑草が
生い茂っている。寺町さんがこの日ま
でに訪れた別の調査スポットでも、水
が完全に干上がってしまっている場
所があったという。

寺町さんたちは、わずかに水が浮
かぶポイントで採集を始めた。水生生
物が暮らせる場所は限りなく小さく
なっている。だが、そんな中でも10匹以上のホトケドジョウが見つ
かった。さらに、やはり絶滅の恐れが
指摘されているヒメタイコウチも2匹い
た。一方で、「条件付特定外来生物」
に指定されているアメリカザリガニの
姿も確認された。

山林の豊かさをはかる バロメーター

そもそも、調査対象となっているホト
ケドジョウとはどんな生きものなのか。

ホトケドジョウは日本の固有種で、
環境省のレッドリストでは「絶滅危惧
IB類」(近い将来における野生での
絶滅の危険性が高いもの)に分類さ
れている。岐阜市では長良川北部の
山裾を中心に生息している。

一般的なドジョウに比べて体がず
んぐりとした円筒型をしているのと、
4対ある口ひげに特徴がある。

ホトケドジョウの生息条件はシビア
で、寺町さんによれば、山からしみ出
した水が入る場所や、地下水が湧き
出る場所にすむ。加えて、低い水温、
緩やかな流れ、底が泥質の環境を好
む。つまり、湧水が出る山あいには好条
件だ。そのためホトケドジョウは、山林
の保水力など豊かさをはかる上での
「貴重なバロメーター」とされ、環境を
診断するモニタリングの対象生物と
なっている。

では、そんなホトケドジョウのモニタ
リングを続ける寺町さんから見て、現
在の山あいの環境はどのように評価
できるのだろうか。現場ではっきりと見
られた変化が、「水が湧いていない」
という事実だ。

この日訪れた3か所目の調査スポッ
トが顕著ではあったが、1か所目、2か
所目の調査スポットもかつてに比べて
水量が減っているという。

なぜ山からの水は減りつ
つあるのか。その根本的
な原因は「山の保水力の
低下」にあると寺町さん
は言う。そしてそれは、山に
人の手がなかなか入らず、
適切な維持管理のため
のお金がかけてられてい
ないことに起因している。

山林が整備されず間伐がなされな
いと、木々が密集して森の地表に太
陽の光が届かなくなる。光が当たらな
ければ下草は育たない。すると雨が
降っても水は地中に浸透せず、その
まま表面を流れ去ってしまう。結果と
して、湧き出すはずの地下水が減少し、
ホトケドジョウなどの命綱となる湧水
が絶たれてしまう。

実際、寺町さんの経年の調査でも
採集できるホトケドジョウの数は減っ
ている。ここ数年の調査では、1地点あ
たりの平均確認個体数はおよそ11～
18匹だったが、2025年度は9.2匹と初
めて10匹を下回る結果に。今年度は
8.8匹でさらなる減少が確認された。
寺町さんは5月、調査データの報告と
ともに、岐阜市に対して「危機的状
況」と訴える意見書を提出した。

そして、これは小さな水生生物たち
に限った問題ではない。山からの湧水
が減るということは、巡り巡って私たち
の生活にも影響が及ぶ可能性がある。
水が湧いていた場所から出なくなれ
ば、生活用水を支える地下水脈もや
がて枯渇していく。農業用水の不足な
ど、将来の地域の生活基盤を脅かす
事態に発展するリスクを孕んでいる。

「いま山に手を入れても、その効果



湿地でホトケドジョウを採集する寺町さん(左)ら

は100年後にしかわからない。だからこそ、自然環境の危機感を伝えるのは難しい」。寺町さんはそう話す。

「SDGs」や「持続可能性」というワードは、昨今トレンドとして注目されてはいる。だが、本当に「持続可能」を体現するような地道な活動に光が当てられているか。寺町さんの言葉には、だんだんと弱っていく山の力を知るからこそそのもどかしさが滲むようだった。

ビジネスとしての可能性は

調査に同行してみて感じたのは、たしかに岐阜の山あいには、貴重な生きものがいまなお残る豊かな自然があるということだった。と同時に、その一方で、決して手放して「美しい宝だ」と言える状況ではなくなってきている現実も見えた。



わずかに残る小さな水たまりで採集してみると……



採集されたヒメタイコウチ

冒頭で紹介したように、岐阜の地域活性化に尽力する秋元さんは「日本の田舎は宝の山」であり、ビジネス的な観点から見れば、その宝に「磨きをかける」ことで、地域外の人たちにも魅力をもって届くことを教えてくれた。私たちの周囲にある自然環境は、現状は「宝」ではあるが、放っておけば宝でさえなくなってしまう。実際に調査に同行してみて、そんな大前提に気づかされた。

そのうえで、やはり貴重な生きものがいる自然環境があるのだから、その魅力にスポットライトを当て、体験や観光につなげていくアプローチは有効なのではないかと感じた。

実際、お金を払ってでも自然の魅力を味わいに来たいと感じる人たちは、地域の外に確実に存在している。

私たち山学が拠点を置く本巣市北部では毎年6月、夜の無人駅に大型観光バスがやってくる。2年前に見かけたのは、夜8時すぎ、東京・新宿と八王子からやってきたツアー客が、闇夜にぽっかりと浮かぶ樽見鉄道・神海駅の駅舎に次々と吸い込まれていくシーンだった。普段はポツンとたたずむ無人駅で、まして真っ暗な夜に人が行き交う様子は不思議な光景だった。

ツアー客のお目当ては「ホテル」だった。樽見鉄道の車両を1台貸し切りにして、車内からホテルの光を楽しむツアーだ。観

賞スポットが近づくと、車両のヘッドライトも車内のライトも落とし、ゆっくりと徐行してホテルを眺める。

都会では、鉄道といえば「痛勤電車」と言われるほどごった返す乗り物だ。それがこの田舎では、車両1台を貸し切りにでき、ホテルを鑑賞するための空間として提供される。混雑した鉄道に慣れた都会の人々にとっては、非日常的でラグジュアリーな体験となるのだろうか。

樽見鉄道の担当者に当時聞いたところでは、普段は回送となる時間帯の便を活用してツアー客向けに提供したとのことで、ビジネスの面で見てもうまく成立しているといえる。

また、私たち山学が昨夏に開いた子ども向け自然体験「ヤマナビキャンプ」にも、可能性はあるのだろうか。前述したように、寺町さんのガイドのもと実施した根尾川での生物調査は、参加した親子にとって、地域の自然環境について楽しみながら学べる機会になった。

調査では、やはり絶滅が危惧されるアカザやアジメドジョウを含む10種類の水生生物を捕まえることができた。寺町さんはこうした生きものの種類から、川の水質が極めてきれいだと教えてくれた。

地域の自然は、守るべき対象としてだけではなく、外部の人を引き付け、地域経済を回す素材としても捉えることができる。逆にビジネス的活用の観点を持つことで、自然環境への関心と理解が広がり、環境を守るという意識にもつながっていく可能性があるのではないだろうか。

山学では今夏も、本巣市北部の山あいでヤマナビキャンプの開催を計

画している。今回は、岐阜県の「令和8年度清流の国ぎふ地域活動促進事業」にも採択された。この事業は、豊かな自然環境の保全をめざす狙いで岐阜県が独自に導入する「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用している。

今年のキャンプでも、水

生生物の採集・調査をするプログラムは盛り込む予定だ。自然の中で思い切り楽しんでもらいながら、実際に貴重な生きものに触れる。子どもたちのそんな原体験が、自然への愛着や、環境保全への興味関心を育む第一歩につながっている。

そして同時に、このキャンプは地域の自然という「素材」に磨きをかけ、地域経済を回していくための一つの事業としての挑戦でもある。もう少し踏み込んでキャンプの価値を考えると、このキャンプは単発の体験イベントではなく、地域資源を核とした複合的なビジネスへと展開していく余地があるのではないだろうか。

例えば、ヤマナビキャンプで提供している生物調査や自然体験のプログラムは、専門家の知見と地域の自然環境が合わさって初めて成立する「ここでしかできない体験」だと言える。こうした希少な体験は、都市部の親子や教育志向の高い層、あるいは企業の研修需要などを対象に、より付加価値の高いプログラムとして磨き上げることもきっと可能だろう。

また、これまでヤマナビキャンプに参加した子からは、夏の水生生物調査以外にも、雪遊びや星空観察といっ



夜8時すぎ、暗闇にぼっかりと浮かぶ中山間地の無人駅を訪れた東京からのツアー客。その目的は？(2024年6月撮影)

た季節ごとのプログラムを期待する声もあった。そうしたシーズンを通した展開や、宿泊・食・地域文化体験と組み合わせで発展させることで、地域内での消費を広げることも期待できる。さらには、鉄道や地域事業者と連携したパッケージ化や、小規模でも高単価なツアーとして域外の人々に届けることができれば、ホテル観賞と同様に「中山間地ならではの非日常体験」を価値として提供するモデルが見えてくる。

重要なのは、単に人を呼び込むことではなく、「その地域でなければ成り立たない体験」にどれだけ意味づけを行い、適切な価格で届けられるかである。

同時に、こうした取り組みは自然環境の上に成り立っているため、その価値を損なわない形で進めることが大切だ。体験人数を絞ったり、ガイドを付けたりするなど、環境への負荷を抑える工夫をしながら運用していくことが求められる。自然を守ることとビジネスは対立するものではなく、適切に価値あるものにすることで、保全の仕組みにもなっていく。

中山間地の自然環境と地域経済の将来に少しでもつながる取り組みにしたい。地域の自然環境の現在地を肌で感じ、そんな思いを新たにしている。



一般社団法人 山学 代表理事 河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ

2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業

2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴

・株式会社朝日新聞社(2010年4月～2021年3月)

・岐阜県本巣市地域おこし協力隊(2021年4月～2024年3月)

・フリーライター、編集者(2021年4月～現在)

2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。

・tete. (2023年5月～現在)

いちじくの栽培／加工／販売

・一般社団法人 山学 代表理事(2024年3月～現在)

学習支援／地域食堂／自然体験

ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもの目に焦点を当てた活動を展開する。



山学レポート



いちじく農園「tete.」の
ホームページ



いちじく農園「tete.」の
Instagram